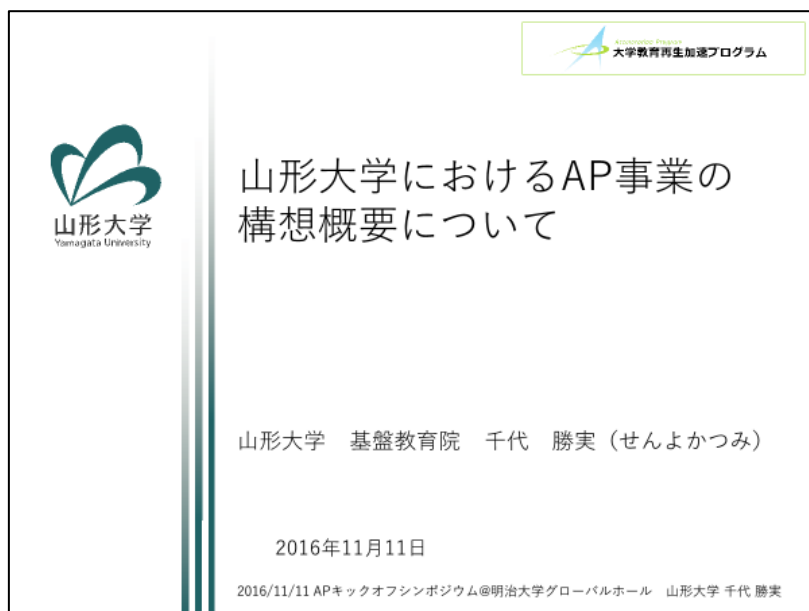


山形大学における AP 事業の構想概要について

山形大学 学術研究院（基盤教育担当）

千代勝実



山形大学基盤教育院の実施担当しております、千代勝実と申します。よろしくお願いたします。今日は本当に雨の中、先生方皆様いらっしやっていたいて、本当にありがたく思っております。山形大学では、約5年ほど前から基盤教育という形で、特に1年生の教養教育ですね。それ

を改革して、全学で担保していくという形で、基盤教育という組織を構成しました。そこでさまざまな改革のプランであり、運営でありというのを実施してきたんですけれども、その中で、山形大学全学として、どういう形で学士課程を再構築していくかというところに至りました。29年度からその一環として、今お話がありました AP も含めまして、様々な御支援を頂きながら新しい教育を実施していくという運びになったというところについて、AP を絡めながらちょっと御説明させていただこうと思っております。

山形大学の学士課程教育改革とAP事業の構想概要

- P • 3年一貫学士課程基盤教育による全学DPの実質化と学長主導の教学マネジメント
- D • 3つの基盤力（専門技能・キーコンピテンシー・国際語学力）の定義と育成
- C • 直接指標による教育評価（3年3回3種の基盤力テスト、授業外学修時間測定、ポートフォリオ等）（安田淳）
- A • 教学IRによる直接指標の評価検証と改善案提示（藤原）
- A • 山形大学アライアンスネットワーク：ステークホルダー（地域・企業・教育委・保護者）による教育評価と参加



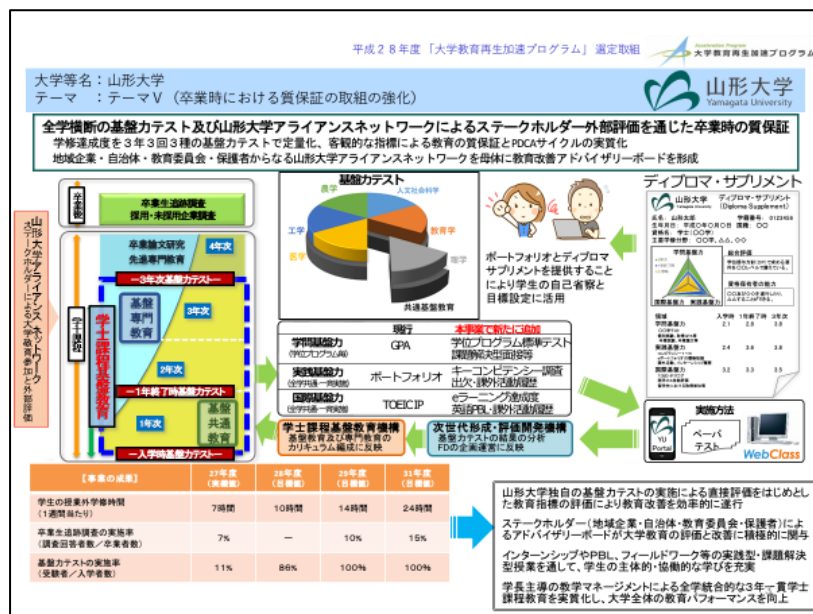
学士課程教育改革というところですね。このAPとどういうふうにかかわりがあるかという話をちょっとさせていただこうと思います。山形大学の学士課程教育をどういうふうに改革するか。本来学士課程教育というのは4年間なんですけれども、山形大学では、初めの3年間、それから学部

によっては次の4年生の1年、若しくは1年と修士課程の3年という形で、3年間の学士課程基盤教育という形に、専門科目も含めて再構築するということを考えております。29年度から完全実施という形になります。これが現在行おうとしている内容になります。そういうことをすることによりまして、全学の先ほど吉成様から御説明ちょっとありましたけれども、ディプロマ・ポリシーですね。全学としてどのように山形大学の学生を卒業させていくか。どのように質保証していくかというところを担保していくというところが一つになります。

次に、それを実施するために、先ほど3つの使命ということで、安田理事からちょっと簡単に御説明ありましたけれども、それを基盤力という形で、ざっくり言いますと、専門技能、それからキー・コンピテンシー、国際理解や語学力という形に分類しまして、それを明確に実施していくということを行っていきます。特にAPで関係あるところは、このCのところのさらにこの基盤力を基盤力テストという形で直接測定していくという形で実施していくと。ほかに授業外学習時間の測定であったり、ポートフォリオだったりという形で、簡単にお話しさせていただきます。このあと私が30分ほど話しまして、そのあと基盤力テストの具体的な開発状況や実施状況について、安田淳一郎先生にお話しさせていただこうと思っております。最後に、このAの教学IRによる直接指標の評価、検証と改善案の提示ということで、これはIRになるかと思うんですけれども、このような形で得られたデータをどのような形で改善に結び付けていくかというところについて、軽くお話しさせていただこうと思います。この内容自体は藤原先生が担当されていて、実際に分析結果なども出てき始めていますけれども、今日のお話は藤原先生のアメリカでの実際ということなので、懇親会等で少し伺っていただいたら何らかのお話を聞けるかと思っておりますので、今日のところはあまりこのところは詳しい内容はちょっとお話しできないかなと思います。

もう一つ、質保証ということで、外部評価というのが大きな課題としてありました。もと

もと山形大学は専門家による外部評価委員会というのを実施していましたので、それについては当然専門家としての御意見を頂くという形だったんですけれども、それ以外にステークホルダーからどのような形で大学があるべきかと。若しくはどのような学生を卒業させてほしいかというところを、地域・企業・教育委員会、あと保護者ですね。保護者は非常に重要なんですが、あまり世の中で言及されていないんですが、保護者を含めた教育評価というところをちょっとお話しさせていただこうと思います。

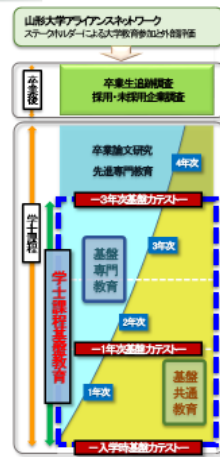


年間の学士課程基盤教育において、1年次の当初、それから1年修了時ですね。それからおおむね3年次というところで、関門というかバリアを設けまして、学生の達成度をそこで測定していくと。これは全学全部ですね。全員について測定していくということを企画しているということになります。ほかに学習時間の測定というところも、比較的ちょっと24時間と1週間ですかね。24時間という形で目標にさせていただいているんですけれども、これについてもどんな形で実現できるのかという、現在の状況について簡単に御説明させていただこうと思います。基盤力テストについては、私のほうで簡単に御説明しますけれども、なぜGPAより基盤力テストのほうがいいのかとか、ポートフォリオより基盤力テストをやったほうがいいのかというところは、私のほうで御説明させていただこうと思っています。

ちょっと混んだ絵なんですけれども、これはAPのウェブページのほうに提示させていただいている資料になっています。これちょっと細かいので、細かい話は順に説明していこうと思いますので、これはこういうものであるというふうに御理解いただけたらと思います。ただポイントとしましては、3

3年一貫学士課程基盤教育

- 専門教育と共通教育を再構築
 - 基盤共通教育
全学学位授与方針(DP)の実現
全学として教育の質保証
大学導入科目・基幹科目・キャリア・語学等
 - 基盤専門教育
学位プログラムDPの実現
カリキュラム・コースの全学最適化と学修効果の最大化
専門教育科目・学部横断科目



3年間学士課程基盤教育なんですけれども、ここの部分を学生が基礎を学ぶところと位置付けました。ここのところで全学への学位授与方針ですね。ディプロマ・ポリシーの実現であったりですね。全学としての教育の質保証を実施していくということを考えております。ここの青い部分が

基盤専門教育という形になります。学位プログラム、具体的には、学科やコースになるかと思うんですけども、一般的には。そこで期待されている卒業時の質保証というものをこの部分で担保していると。じゃあ4年生というのはどうなるのかというと、当然ですけども、学生によっては卒業のための研究を行う。若しくは就職活動を行う。若しくは修士課程に進むという形で、様々なキャリアの選択が発生します。そこでこのところで基盤力テストというのを実施することによって、学生にとって自分がどういう立ち位置にあるか。若しくは各学位プログラムの中でのその学生のあり方というのを知るといった形になっています。ほかにカリキュラムやコースの全学最適化と、若しくは学習効果の最大化、つまり同じような内容の授業をよその学科や学部で実施しているならなるべく合わせていこう。若しくはお互い相乗効果が出るような授業が作れるのなら作ろうという形で、それを全額で担保していくということを実施していくような内容になっております。

3つの基盤力の育成—全学DPと関連した基盤力

- 学問基盤力—**自律的に課題に取り組む専門力**
専門知識の体系的習得と実践的な運用体験
総合大学の学際的な強みを生かした応用力の獲得
- 実践地域基盤力—**社会でリーダーシップを発揮する人間力**
力強い学びを保障するキーコンピテンシーの育成
地域課題に挑戦し生涯学び続ける自己学習力獲得
- 国際基盤力—**実践的な英語で多様性に挑戦する国際力**
基盤としての英語力を4技能・専門別に習得
英語PBLの実施、様々な活動を通じた国際理解

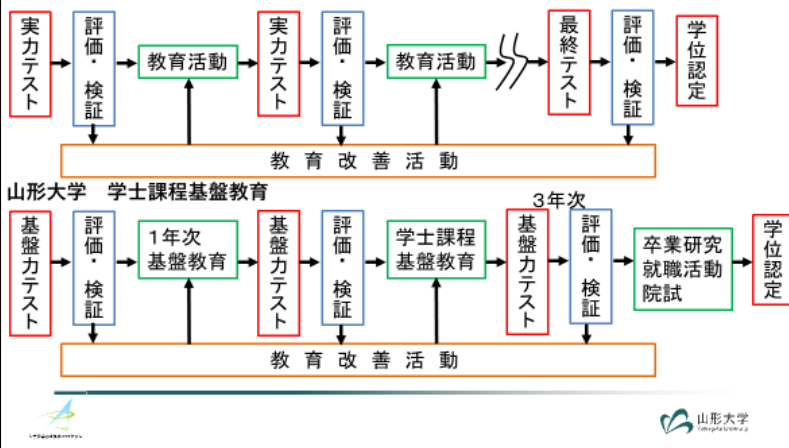


次に3つの基盤力ということで、全学DPと関連した基盤力ということになります。学問基盤力なんですけれども、これはまさに専門性を育てるところになります。なので、これまで先生方がよく御存じの専門教育の中で、特に獲得していくような能力になるかと思うんですけれども、

当然1年生でもこの基礎になるような学びというのが当然与えられていくべきところになります。次に、最近特に重視されているような内容だと実践、地域が入っています。基盤力という形です。社会でリーダーシップを発揮するような人間力ということで、まさにキー・コンピテンシーとか、人間力とか、そう呼ばれるような能力になります。もう一つは国際基盤力、これは英語と書いてありますけれども、実際のところ様々な外国語も含まれますし、あと国際的な理解であるとか、共生であるとか、そういうものも恐らく含まれると思います。数字として分かりやすいのは英語力だったりしますので、とりあえずそれを全面に押し出していますけれども、PBL を行ってみたりとか、そういうことも計画されております。

卒業時の質保証：なぜ学士課程基盤教育？

そもそも質保証や達成度測定を自然に考えると…



質保証ということ考えたときに、学士課程基盤教育ということを行うんですけれども、そもそも今のそれぞれの授業についてもそうなんですけれども、普通に考えると、実力テストをまずやって、それについて学生なり我々教員なりが評価・検証して、授業をやって、また実力テストをやって、どれだけ伸

びたかというのを調べて評価・検証して、また授業をやってという形で、普通に考えると、

非常に自然に分かりやすいかと思います。こういうのが本来つながっていくといいんですけども、実際この部分というのが様々な事情で切れてしまっている。若しくはこの評価・検証の部分がつながっていないので、それぞれの授業があまり有機的に結合していないということもありまして。

じゃあ、ここの学位認定がどうなんですかという話が、まさにカリキュラム・ポリシーであったり、カリキュラム・マップ、カリキュラム・チェックリストであったり、そういうものを作っていくという形になっています。ただ実際のところ、後でもちょっと軽く説明しませうけれども、カリキュラム・チェックリストを作ったから、マップを作ったから、質保証できるかと思っている先生はあまりいないと思うんですよね。その辺りも簡単に後で説明したいと思います。山形大学はこれについて、1年次の基盤教育というところで、基盤力テストを実施して、ここの部分を評価してやろうと。基盤力テストを1年次終わりにやると。さらに学士課程基盤教育、これは先ほどの2年生・3年生のところになるかと思うんですけども、これでまた評価してやると。ここで評価した結果、学生のほうにフィードバックしてやる。若しくは学生が社会に提示できる形で、ディプロマ・サプリメントでその他ですね。提示できる形で、例えば卒業研究に向かう、就職活動に向かう、院試に向かうということで、ここで専門の仕上げと、若しくは次につながっていく教育活動を行っていくというふうな形で捉えております。こういう形で学士課程基盤教育というものを捉えていくという形になっています。

卒業時の質保証：なぜ直接指標・客観指標？

- そもそも教学データはビッグデータではない
 - 1学科コース 数十～数百人（統計的確度は低い）
 - 1サイクル4年かかるがそれ以前に経営判断
- 指標の有用性や精度が低いと説明力がない
 - 精度が低い・フォーマット不揃いでは使えない
 - 解釈の余地が大きい指標は結論を導かない
- 解析するための人的・金銭的リソースが少ない
 - 少数の単純明快・基本的な指標で分析
 - 種類多い・精度低いと特異値が必ず発生



なぜ今回の大きなテーマである、直接指標であったり、客観指標であったりということなんですけれども、なぜそうではなくてはいけないのかということです。教学データはまさにビッグデータではないということです。つまり、1学科とか1コースを考えたときに、大体その単位で学生のデータって欲

しいんですけども、大体数十から数百人です。多分1学科1コースが1000人を超えるような大学というのはまずないかと思っております。そういう意味で、やはり統計的な角度というのは1000人くらいないと難しいよねというようなことを考えると、ちょっと苦しいわけですよ。さらに1サイクル4年かかるので、それを待っている間に、次の改革であった



り改善であったりということを考えていかないといけないんですが、その以前に時間がかかり過ぎるので、もっと早く決めないといけないということになります。次に、指標の有用性とか精度があまり高くないと、様々な議論をしていく上で説明力が低いわけです。そもそもデータの統計的精度が低いので、指標の有用性が低いと、具体的にいうとフォーマットが不ぞろいだったり、精度が低かったり、つまり五択の質問だったのと四択の質問が重なり合っていたりとか、GP グレードポイントで計算していたり、TOEIC の成績で計算したりとか、いろいろフォーマットが不ぞろいだったら使いにくいわけです。さらに学生の感想であったり、教員の授業評価とかそういうものも含まれるんですけども、解釈の余地が大きい指標というのは、なかなか結論が一位に定まらない。若しくは少数に定まらないので、非常に難しいということになります。

特に切実なのが、解説するための人的・金銭的リソースが我々非常に少ないということもあります。なので、なるべく少数で精度の高くて単純明快な指標で分析したほうがいいわけです。種類が多かったり精度が低いような指標を使ってしまうと、必ず特異値が発生してしまって、これは藤原さんの受け売りですけども、特異値が発生して、意見がきちっと定まらなくなるということです。つまり迷いが生じるということになるわけですね。

APの構想概要 2016/11/11 APキックオフシンポジウム@明治大学グローバルホール 山形大学 千代 勝実 8

卒業時の質保証：なぜ基盤力テスト？

- カリキュラムチェックリストは質を保証するわけではない
 - 枠組み・メニューであり自己点検の一部
- GP/GPA/GPAは質保証・達成度測定の指標ではない
 - GP/GPAは学位プログラムの修正・授業担当者の変更・インセンティブによって容易に変動する
 - その授業時での評価で「大学環境」の教育能力とは異なる、卒業時に維持されているか不明
 - 暦年・学部/学科・大学間で比較不能
- ポートフォリオは整理が難しく分析が不可能
 - ポリシーを持って収集していても雑多な集積

なので、基盤力テストなんですけれども、先ほど申し上げましたように、カリキュラム・チェックリストを作る。若しくはカリキュラム・マップを作るということを我々はやってきていますけれども、先生方もやってらっしゃるかと思うんですけども、必ずしも質を保証するわけではないわけです。卒業

時の質を保証するわけではない。なぜかと言うと、必要だとは思いますが。ただ枠組みやメニューであって、ある意味自己点検の一部であったり、学生が見て分かるということであって、例えば社会に、企業様に提示してこれを見せて「うちは保証しています」と言われたら、多分鼻で笑われちゃうと思うんですよね。ですので、ここは質を保証する枠組みの一つかもしれないんですけども、これをやったからといって質保証ではないということになります。

次にグレードポイント、まさに GPA とか、方向で言うと評定平均のようなものでしょうかね。これもそうなんですが、質保証とか達成度測定の指標にはなり得ません。グレードポイ



ントとかグレードポイント・アベレージの学位プログラムの中で修正したり、若しくは授業担当者の変更があったりということで、若しくは、例えば GPA が 2.0 以下は落とすとか、そういうふうな形で、いろいろインセンティブや精度が変わると、かなり容易に変動してしまいます。なので、GPA が毎年毎年上がっていているからという理由で、授業が、若しくは大学の教育力が上がっているというのは全く言えません。さらに、その授業のときの成績です。つまり授業の成績を言っているだけなので、学生が必死にそのテストの前の日に丸暗記して、例えば優を取ったとしても、4年後にちゃんと覚えているかという、多分覚えていないわけです。そういう意味で、卒業時に維持されるか不明でありますし、さらにキー・コンピテンシーとかの話になってきますと、大学の授業だけではなくて、24 時間 365 日ですね。大学以外でいるような環境、若しくは大学の中でのいるような、授業以外の環境というのは必ず学生にあるんですけれども、その部分というのは測定できません。

なので、そういうのはちょっと GPA で難しいと。当たり前なんですけれども、毎年毎年変わったり、学部学科間、つまり医学部の GPA と文学部の GPA というのは比較してもあまり意味持ちませんし、当然大学間でもあまり意味を持たないということになってきます。さらにポートフォリオを本学でもやっていますけど、なかなか整理が難しくて分析が不能と。つまり先ほど申し上げましたように、フォーマットがそろっていないデータはいくら取っても、我々は解析ができないということになるわけです。多くの大学ではポリシーを持って収集されていると思うんですけれども、なかなかこれを生かして教育改善に持ってくるというのは、かなりの努力が必要です。ですので、あまり一生懸命作っても、実はあまり使われないということもよくあるかと思えます。

APの構想概要 2016/11/11 APキックオフシンポジウム@明治大学グローバルホール 山形大学 千代 勝実 9

卒業時の質保証：キーコンピテンシー

- 学位プログラムで必要とされるキーコンピテンシーは異なる
 - 既存の枠組みを疑い現場で臨機応変に課題解決する：ベンチャー企業の社長：○ 外科医：×
- TPOに応じて必要とされるキーコンピテンシーは異なる
 - 全ての行動で全てのパラメータが最大な人は暑苦しい
 - 必要な時に必要な行動特性を示す「適応」を指導
- より基本的な性格・習慣の測定（5因子調査）を導入
 - 心理学的・科学的に確立されている
 - 外向性・協調性・勤勉性・情緒安定性・知的好奇心

基盤力テストのうち、多分皆さんが特に知りたいような話だと、キー・コンピテンシーですね。キー・コンピテンシー、人間力とかということところです。ポイントとしては、学位プログラムで必要とされるキー・コンピテンシーというのは異なるわけです。例えば既存の枠組みを疑い現場で臨機応変に課題解決

するというのは、ベンチャー企業の社長さんとそうあってほしいと思うんですけれども、例えばお医者さんがしょっちゅうしょっちゅう既存の枠組みを疑っていたら大変なこ

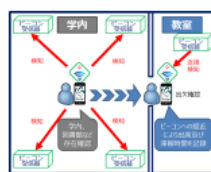
とになるわけです。なので、きちっと学んでいただいて、今最善の知識で丸飲みしていただくというのが当然医者育てるときには必要になるわけです。ですからこの部分ですね。すべてのパラメータですね。いいと言われているようなこととこのを全部挙げる必要は本来ありません。次に、TPO に応じて必要とされるキー・コンピテンシーというのは異なります。なので、1日24時間365日ですね、その積極性があったり、リーダーシップがあったり、協調性があったり、好奇心旺盛でというような人ってかなり暑苦しいわけですよ。言ってみたら松岡修造みたいな人になるわけです。なので、そういうことは必要ないわけです。

つまり、必要とときに必要な行動特性を示せばいいわけです。例えば引っ込み思案だったり消極的な学生さんでも、営業に行ったり、こういう場でしゃべるときに、ちょっと頑張れると、そこだけ頑張ればいいよという形で、適応指導するというのがむしろ大学のあり方かなと思います。そういうこともありまして、まず1年生で性格とか習慣の測定のほうがいいのではないかと。ビッグ・ファイブと言われるやつですけども、これを今年の1年生全員に実施しました。これ自体は心理学的にもある程度科学的にも確立されているので、そんなにブレがないと。実際山形大学の学生の平均を全部取っていくと、日本人の平均とあまり変わらなかったりしますので、精度としては悪くないだろうと。実際に測定できる内容というのは、外向性・協調性・勤勉性・情緒安定性・知的好奇心ということで、実際このキー・コンピテンシーと意外に重なっているんで、あまりこの部分をいろいろ細かく分割するより、基本的な部分をまず学生さんについて認識してもらって、必要とところの適応というのを指導していくという考え方のほうがむしろ現実的かなと思います。これは就職の指導とかでも、キャリアなんかでも、実際にそんな形で、試験だったり調査とか検査を受けてやっているというのは、多分どこの大学でもそうかと思うんですけども、若しくは就職、企業さんの採用のときもそういう形でなさっているかと思うんですけども、これも恐らく扱いやすいだろうというのが一つです。

卒業時の質保証：授業外学修時間の測定

- 現行
 - 学修成果等アンケートでの質問
 - eラーニング
 - 学修日記（みずから学ぶ）
- 計画
 - スマホアプリでの入退室管理（教室・学内・図書館等）
 - モニター学生による記録

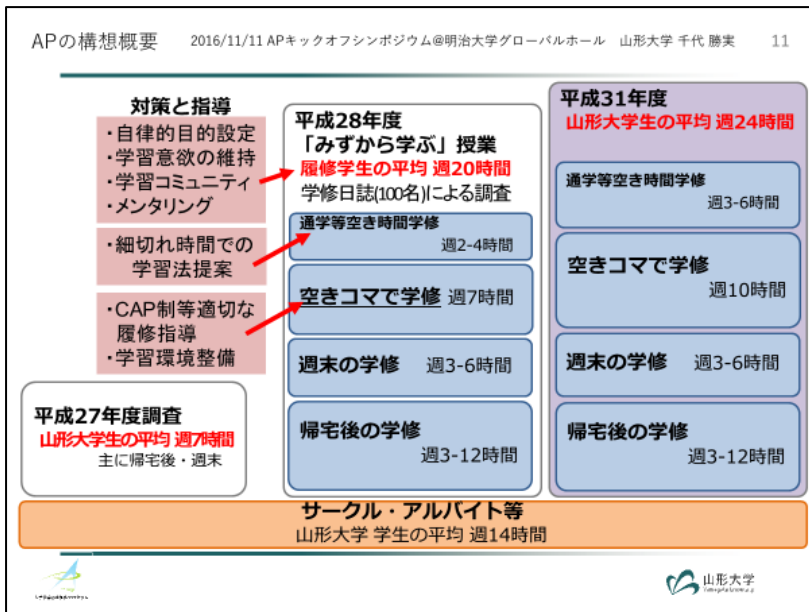
学生ポータルアプリ・基盤力テストプラットフォーム・ビーコン(BLE)による入退室管理・学生スケジュールはタイムインターメディアさんに開発していただきました。感謝！



次に卒業への質保証のところ、授業や学習時間というのをどういうふうに、これ入っていないですね。古いやつです。まあいいでしょう。学修成果アンケート等で学習時間を測定しています。これほかにeラーニングとか、こういうのはよくあるかと思うんですけども、私が担当している授業で、自

ら学ぶという授業で学習日記を今書いてもらっています。大体 120 人くらい受講しているんですけども、大体ここに本当は絵があったんですが、古いやつで、古いやつというか、見せるやつじゃない図が挙がっているのでもちよとあれなんですけれども、学生さんが大体 1 日何時間勉強したかというのを線を引いていただくということをやっています。ほかにスマホアプリで入退室管理というのをやろうと考えています。具体的には教室にビーコンと呼ばれる電波を発信する装置がありまして、そこに入室すると在室確認ができるよと。出ていくといないということが分かるよということで、これちょっと学部長会議みたいなところでも話ししていないんですけども、火事になったときにここにいないことをどやったら証明したらいいんだらうねという話になったときに、私は言わなかったんですけど、そういうこともよということですね。こういうふうなものを中心に、基盤力テスト等を開発したところ、様々なスマートフォンアプリというのを作成しました。

このときにタイムインターメディアさんという会社にたくさん開発していただいて、かなり無理を言って開発していただきました。今日も来ていただいているので、懇親会等いろいろソリューション等を聞いていただくといいかと思います。実際のところ、うちの学生の 1 年生、当初で 99%の学生がスマートフォンを持っています。持っていない学生に聞いても、入学祝いで買ってもらうとか、そういう話を伺っていますので、恐らく次の大学でのソリューションの一つとしては、スマートフォンとアプリを使ったような何かというものになっていくと考えています。パソコンが今まで前提だったと思うんですけども、スマートフォンになっていくのかなと考えています。



学習時間が実際どんな感じで測定できているのかというところをちょっとお見せしたいと思います。27年度です、昨年度ちょっと見てきたんですけども、大体週7時間ですよというアンケート結果が出ています。ただアンケートというのは、本当はちゃんとやっているときもあるし、やっていな

いときもあるんだと思うんですけども、ざっくり1日1時間で7時間みたいな感じになっているというのが正直なところだと思うんですけども、やっている時間は帰宅後・週末と書いてあるんですけども、実際に26年・27年・28年に、授業外学習をやらしてもらった授業というのをやっています。

そこで今120名ですけど、100名とか120名くらいのメンタリングを毎週僕がやっているんですけども、大体ですね、平均20時間くらい学習しています。実際どこでやっているかという、帰宅後の学習とか週末の学習というのは分かりやすいんですけど、意外に空きコマでの学習というのが多いわけです。つまり授業がない時間というのを勉強の時間に充てている学生がけっこういるというのが分かってきたわけです。なので、まさにキャップ制とかそういう形で、授業を受ける数を減らしてやると、意外にこういうところできっちり勉強するので、キャップ制は意味ないよねとか思っている先生もけっこういらっしゃいます。僕も思っていたりしたんですけども、むしろ授業外学習という観点から見ると、これ非常に意味がある内容だと思います。もう一つは細かいところとかもあるんですけども、どっちかという、目標を自分で立てさせたりとか、学習意欲を維持させたりとか、それから学習コミュニティをやったりとか、毎週メンタリングで「お前勉強しているか」と聞いてやるというのがけっこう効くみたいで、大体けっこう長い時間を勉強しています。山形大学1700人なので、ある意味上位5%10%ぐらいの上積みと言ったらそうなのかもしれないですけども、意外に勉強しているということです。これを改善していくと、29年度からは、ほぼすべての学部でキャップ制が導入されるというふうに検討されているので、引き込まれ学習というのかなり現実的な話になってきますし、この辺りはあまりいじらなくても、比較的達成しやすいかなと思っています。

卒業時の質保証：学士課程基盤教育機構の組織

- 学士課程基盤教育機構運営会議・統括教育ディレクター会議
 - 教育担当副学長・各学部教育担当副学部長で構成
 - 全学最適という観点から教育効果の最大化・効率化
 - DP/CP等の作成と検証、調整
- 共通教育実施部
 専門教育実施部
 - 教育の実施・実務
 - 基盤力テストの開発



あまり時間もなくなってきたので、そうですね、ポイントとしては、学士課程基盤教育の一番大きなポイントとしては、統括教育ディレクター会議であったり、学士課程基盤教育機構運営会議であったりという形で、全学の各学部の教育担当副学部長が参加して、安田理事もそうですけれども、全学最適

という観点から教育改善、若しくは先ほど申し上げました最適化ということ、効率化というところを議論するという雰囲気はかなり出てきたというところがあります。

統括教育ディレクター会議は、この3年ほど実施されているんですけども、かなりDPやCPの見直しのところで、先生方の意識が上がってきて意見交換をすると。若しくはお互い折り合う場所を探してうまく授業担当を交換していくとか、そういうことも実施されつつあります。そういうこともありまして、かなりコミュニケーションを内部で取ると。学部の壁を越えて、若しくは教養教育と専門教育の壁を越えて、様々な意見交換をするということから非常に効果が出ているのかなと思っております。

卒業時の質保証：基盤共通教育

- 導入科目：大学導入、学部混合20名クラス：AL、教員FD
- 基幹科目：人間・共生を考える、山形から考える：AL
 - フィールドワーク（4割の学生が参加）
- 教養科目：人間と社会・自然と科学・応用と学際
- 共通科目：英語改革、キャリア開発
 - 英語PBL、eラーニング(2年次以上)
 - キャリアデザイン(前期のみで55%の学生が受講)
 - 早期インターンシップ(1年次 35名参加)



ここら辺は見ていただいといるところだと思います。いくつかポイントになるところだけ御説明させていただきますかね。ここら辺は山形大学の学生に受けてほしいという授業がここら辺になります。あとキャリアデザインなんかも、キャリア教育なども、55%と書いてありますけれども、実質

様々なキャリア教育を前期だけでも実施していますけれども、大体7割から8割の学生が

必修化せずに受講しています。その中でも早期インターンシップですね。今年度 35 名参加していますけれども、地域企業、先ほどちょっと話が出ました。

後で説明しますが、アライアンスネットワークの中の企業さんとか含めて、早期インターンシップに御協力いただいて参加してもらっています。やはり参加した学生は、一つじゃなくて二つ行きたいとか、そういう形で自分の視野を広げていくということも進んでいるかなと思います。

卒業時の質保証：基盤専門教育

- 基盤専門教育：1～3年次で専門の基礎を学ぶ準備期間
- 4年次、4～M2はより専門性・自律性の高い学び
- 4年次は卒業研究と進路の決定

- 学問基盤力テスト
 - 新規作問・専門課程で必須のテスト
 - 院試や授業の過去問
 - 面接（課題解決型など）



質保証のところ、4年生までの話はこういう形になるかと思っています。先ほど簡単に説明しました。学問基盤力テスト、内容ですね。これは特に1年生の部分については、安田淳一郎先生にお話しいただくので、こういう形で作りますよというところなんですけど、3年生のところはあまり厳しく新規で

ばしっとしたのを作ってくれということはありません。院試の過去問とか、必要であれば授業の過去問であるとか、そういうものでも構わないし、面接であったり、既にやっているところであれば、そういうのを使っていただいてもいいですよという形で、3年生についてはお知らせしています。実際そういう形で動き始めているかなと思います。

卒業時の質保証：基盤力テスト

- 学問基盤力テスト（1年次）
 - 数的文章的理解・数学・物理学・化学・生物学
- 実践地域基盤力テスト
 - 5因子調査（入学当初）
 - 出欠状況・ポートフォリオ（現存）
 - フィールドワーク・インターンシップ・課外活動実績
- 国際基盤力テスト
 - TOEIC（現在2回実施）
 - eラーニング、留学等国際関係活動実績

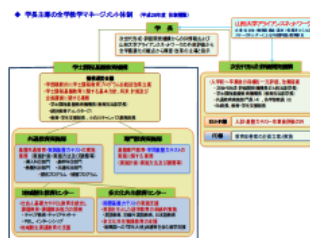


1年生の部分については、後でまた御説明があるかと思いますが、ここです。ここが後で御説明あるかと思いますが、先ほどの実践地域基盤力テストについては、先ほどの5因子調査というのを入学当初、9割以上の学生が受験しました。出欠状況、現在ICカードリーダーでタッチさせて調べていますけれども、それ以外にも先ほどありました、スマートフォンでの入退室管理であるとか、あとフィールドワーク・インターンシップ・課外活動実績。国際基盤力テスト、今はもう既にTOEICを1年生に2回実施しています。それをまた3年生にも広げたりという形で実施する予定にしていますし、eラーニング等も実施します。そのほか留学等の国際関係活動実績なんかも加味するという事です。

1年生の部分については、後でまた御説明があるかと思いますが、ここです。ここが後で御説明あるかと思いますが、先ほどの実践地域基盤力テストについては、先ほどの5因子調査というのを入学当初、9割以上の学生が受験しました。出欠状況、現在ICカードリーダーでタッチさせて調べていますけれども、それ以外にも先ほどありました、スマートフォンでの入退室管理であるとか、あとフィールドワーク・インターンシップ・課外活動実績。国際基盤力テスト、今はもう既にTOEICを1年生に2回実施しています。それをまた3年生にも広げたりという形で実施する予定にしていますし、eラーニング等も実施します。そのほか留学等の国際関係活動実績なんかも加味するという事です。

卒業時の質保証：IRとFD

- 次世代形成・評価開発機構
 - IR担当理事・教育担当理事・学部教員
 - IRによる教育評価と検証
 - FDによる教育改善
- IR
 - 教学データの集積
 - データの分析と評価検証
- FD
 - 合宿FD/SD等教育改善

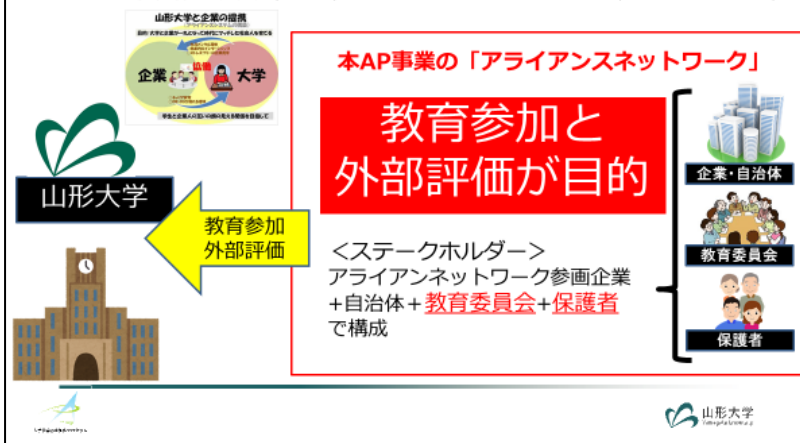


ただやはりなるべく数字で取れるもののほうがですね、これとかこれとか、これとかこれとかのほうが、使いやすいということですね。この話も多分EMIR勉強会のほうでいろいろ出てくるんですけども、それぞれ教学データに限らないIRデータの集積と分析・評価・検証ということになります。これも先ほど御紹介いただきましたけれども、FDについては山形大学はかなりブランド化されているかなと思います。合宿であったり、大学間連携でのFDであったりという形で、様々なFD活動を実施しています。また授業の中でも実施しようとしていますけど、ちょっとディテールになるので、そこは飛ばさせていただきます。

ただやはりなるべく数字で取れるもののほうがですね、これとかこれとか、これとかこれとかのほうが、使いやすいということですね。この話も多分EMIR勉強会のほうでいろいろ出てくるんですけども、それぞれ教学データに限らないIRデータの集積と分析・評価・検証ということになります。これも先ほど御紹介いただきましたけれども、FDについては山形大学はかなりブランド化されているかなと思います。合宿であったり、大学間連携でのFDであったりという形で、様々なFD活動を実施しています。また授業の中でも実施しようとしていますけど、ちょっとディテールになるので、そこは飛ばさせていただきます。

卒業時の質保証：山形大学アライアンスネットワーク

これまでの外部評価委員会（専門家）+アライアンスネットワーク（ステークホルダー）



といたこうというのがねらいです。保護者説明会等も様々実施しています。うちの学長もいつも保護者様にお酒をついで回ったりとかしていますけれども、そんな形で保護者説明会等全学で実施したり、これまで実績持ってやっているんですけども、さらに教育参加、若しくは外部評価という形で、様々な地域企業の、専門家ではないんですけども、ステークホルダーに参加していただくということを考えています。というか、もう既に構成されているんですけども、参加していただくことになっています。

アライアンスネットワークですね。外部評価自体は既に山形大学はずっと実績があります。教育関係の先生方に参加していただいて、いろいろと見ていただいたということになるんですけども、それだけではなくて、地域の企業とか、保護者さんとかですね。そういう人たちに参加し

よく尋ねられる質問

- Q. 基盤力テストって本当にできるんですか？
- A. H26から開発開始、H28に試行済、現在試行中、H29実施
- Q. テストを全学部で実施ってどうやって説得したんですか？
- A. 質保証でテスト利用はわかりやすい。すでに実施している学部、院試等の過去問の利用や面接など学科ごとにやりやすい手法を提示、きめ細かな意見交換と執行部主導体制
- Q. 科目改変やAL充実で教員の授業負担が増えるのでは？
- A. 授業負担減を確約した上で科目改変。H29はH28と比較し基盤共通科目で授業を整理し10%以上開講数減
- Q. キャリア教育、なぜそんなにうまくいってるの？
- A. 授業が魅力的、教員や地域企業の協力、学生がまじめ

実施していました。これはアクティブ・ラーニングをどうやって効果測定するかという、基盤教育院内のプロジェクトで実施していたんですけども、実際に28年度の学長裁量経費を頂きまして、全学生に対して先ほどのキー・コンピテンシー関連のテストをスマートフォ

時間がそろそろ私の持ち分が来ましたので、よく尋ねられる質問ということで一応まとめておきました。どこかに行くといつも聞かれるので、「基盤力テストって本当にできるんですか」とよく聞かれます。「そんな大それたことよくできるの」と聞かれるんですけども、既に26年度から開発を実は

ンベースで実施したということです。現在、専門科目についてもずっと試行していますので、29年度には実施というのは全然できるだろうというふうに考えております。これもよく聞かれるんですよ。「テストを全学で実施って、どうやって説得したんですか」というのがあります。例えば「医学部なんか乗ってこないでしょう」とか、「どこどこの学部の先生とかで文句言っている人っていっぱいいるんじゃないの」と聞かれるんですけども、実は質保証でテストを利用するのは意外に分かりやすいんですよ。つまりグレードポイントがどうかというのを比較するよりも、テストのほうがわかりやすいというのは一つあります。既にそれに近いことを実施している学部もございますし、あと因子とかそういうあまり手間のかからない形で実施してくださいと。面倒くさいところは基盤教育で担当しますよと御提示したり、きめ細かな意見交換と執行部主導体制という形で実施しています。ただ昨日も、僕のところに相談に来た先生が、「千代先生のことを嫌っている人がいっぱいいますよ」とかけっこう言われます。月に1回くらいそういう御報告を頂くんですけども、多分その先生が一番嫌っているんじゃないかなと思うんですけどね。そういうこともあります。

あと科目改編とかアクティブ・ラーニングを充実していこうという形なので、教員の授業負担が増えるのではないかという形でよく聞かれるんですけども、授業負担減という形で、先ほどの統括教育ディレクター会議等で御説明した上で改編しています。なので、授業は大体10%くらい減らしました。ただそれは全体に見て整理しましょうと思えるような授業が中心になっています。キャリア教育もけっこう国立大学で、キャリア教育をほとんどかなり高い人数ですね。前期・後期合わせると延べ1700人はいきますかね。くらい受講しています。ほぼ100%に近いくらい受講しているんですけども、授業がうまい先生であったりですね。あと地域企業とか、教員がよく協力してくださったりしますし、あと地方国立大学だと学生さんが真面目というのもあるので、けっこう熱心に参加していただいているかなと思います。

最後に

卒業時の質保証・学生の達成度は、授業のパフォーマンスやテストやGPAだけで測れるものではありません。

「学生の生活環境の一部としての大学」における教育の質保証は、学生や保護者、地域や企業、そして国民といったステークホルダーが、この大学はすばらしい、期待できると思ってくれることが一つの形です。

もっとも身近なステークホルダー「自分」（教員・職員）が、所属する大学を好きになって、もっともっと良くしようと思ひ、今学生であれば、この大学に入学し学生生活を過ごし卒業しようと思えなければ、他人は説得できません。

自分が好きになれる大学教育を作りましょう。



あと最後なんですけれども、ここで何かどんでん返しみたいなことを言うんですけれども、パフォーマンスとかテストとか、GPAで卒業時の質保証というのは、本当は図れないわけです。これだけで測れないと。結局大学というのは、別に授業だけやって、それを提供しているだけじゃないので、大学の環境

です。大学というのは環境なので、結局すごく緩い話なんです、学生とか保護者とか、そういうステークホルダーがこの大学の教育はいいよねと言ってくれたら、多分一番質保証されているんだと思うんですよ。なので、期待してもらえることが非常に重要な形だと思います。最も身近なステークホルダーというのは自分なわけです。先生方だったら自分ですし、職員もそうですし、自分自身が、大学をもっと良くしようと思わないと、はっきり言って、学生がこの大学に入って勉強しようとか思いません。つまり、自分が学生だったらこの大学に入りたいよねと思うように直さない、多分説得できないということです。企業さんでは自分の作っているものがいいものだと思わなかったら頑張れないということですね。なので、自分が好きになれるような大学教育を作るというのが恐らく本来の質保証につながっていく一番の元かなと思います。ちょっとどんでん返しになっちゃいましたけれども、ここら辺で終了させていただきます。どうもありがとうございました。